

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284144

研究課題名(和文) 中世盛期教皇庁の統治戦略とヨーロッパ像の転換

研究課題名(英文) Papal Governance strategy and its influence on the European Idea in the High Middle Ages

研究代表者

池上 俊一 (IKEGAMI, Shunichi)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：70159606

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本共同研究によって得られた成果は以下の3点にまとめられる、第一に、初期中世からルネサンスに至るまで、教皇庁の制度は、内外のコミュニケーションを通じて、ヨーロッパ全体の変動に対応するかたちで展開していた。第二に、イベリア半島から北欧・東欧に至るまで、ラテン・カトリック世界における普遍君主としての教皇庁の影響が、君主から地方に至るあらゆるレベルで確認された。第三に、ビザンツ帝国、イスラム政体、モンゴル帝国といったラテン・カトリック世界の外部との交渉を通じ、教皇庁はヨーロッパの世界認識ならびに自己認識を変化させた。

研究成果の概要(英文)：This 4 years joint research on the governance of medieval papacy revealed three conclusions. First, the papal curia developed its bureaucratic and diplomatic systems according to European political and diplomatic changes on the base of internal and external communication. Second, as a universal monarch, it had its influence on all European polities belonging to Latin Christendom from Scandinavia to the Iberian peninsula. Third, papal contacts with the Byzantine empire, Islamic polities and the Mongols outside Latin Christendom expanded European knowledge on the world and changed its self-recognition.

研究分野：西洋中世史

キーワード：教皇庁 盛期中世 ローマ 皇帝 統治 コミュニケーション ビザンツ帝国 モンゴル帝国

1. 研究開始当初の背景

西洋中世世界を理解するための最も重要な要素のひとつは、その宗教的基盤であるラテン・カトリック世界の形成と展開である。研究代表者は、このラテン・カトリック世界の実態を解明するために、とりわけ盛期中世(11~13世紀)における宗教運動や宗教心性に着目し長年研究を積み重ねてきた。より具体的には、フランスの中世史家ジャック・ルゴフやジャン＝クロード・シュミットによる分析枠を応用し、修道運動、十字軍、異端活動、民間信仰、象徴儀礼、想像界といった問題群から、前後の時代とは異なる西洋中世に固有の宗教的要素を明らかにしてきた。その主要な研究内容は、いずれも科研費の研究成果である複数の研究書として刊行された(『ロマネスク世界論』(名古屋大学出版会 1999年)、『ヨーロッパ中世の宗教運動』(名古屋大学出版会 2007)など)。研究代表者は、このような一連の研究を刊行する過程において、宗教運動のあらゆる場面に教皇が関わってくることを確認し、ラテン・カトリック世界の展開を理解するために、次の段階として教皇庁の役割に着目する必要があるという考えに至った。

盛期中世の教皇庁の歴史的研究は、20世紀前半のドイツでの理念史研究やイタリアでの教会国家研究を経て、第二次世界大戦後のアメリカにおける教会法や十字軍研究を中心に長足の進歩を遂げた。こうした歴史学としての教皇庁研究の一つの到達点は、世界中の教皇史研究者の総力を結集した Ph.Levillain (ed.), *Dictionnaire historique de la papauté*, Paris, 1994 である。この事典でまとめられた現状をふまえ、今もなお、A.Paravicini-Bagliani、Klaus Herbers、Jochen Johrendt らを中心に教皇庁の研究は進展している。本邦においても、欧米の研究成果を活用した山辺

規子「中世の教皇領」『国家 理念と制度』(1986)、関口武彦「ローマ教皇庁と情報」『歴史学研究』625号(1991)、甚野尚志「ローマ教皇の即位儀礼」『幻影のローマ』(2006)などの研究を見いだすことができる。

しかしながら以上のべた研究の多くは、教皇国家というイタリア半島の一小国の行政機関としての教皇庁の研究に集中してきたきらいがある。それ自体は重要な論点であるとは言え、盛期中世の教皇庁にはもう一点見過ごすことのできない特徴を指摘できる。それは、盛期中世のラテン・カトリック世界において、その普遍君主である教皇を支える教皇庁は、世俗問題であれ教会問題であれ、ヨーロッパ全体でおこる諸問題の様々な局面に深く関わっていた点である。教皇庁は教会国家という一地方政体であると同時に、キリスト教世界全体の統率機関でもある。本研究においては、従来重視されてきた理念的側面や教会国家的側面ではなく、教皇のもつ普遍権力を具体的に担保する教皇庁組織の機能の解明に重心を置くことで、盛期中世における教皇庁とヨーロッパ世界の関わりについて、今何が問題であり、どのように解明すべきかという点を提示できるようにする。

2. 研究の目的

本科研が明らかにするのは次の三点である。

(1) 教皇庁それ自体の展開プロセス

第一に本研究で明らかにすべきは、盛期中世における教皇庁それ自体の展開プロセスである。11世紀末の改革運動と相前後して、教皇庁は組織としての確立期に入り、教皇を支える枢機卿団の成立、教皇特使や書簡による情報ネットワークの確立、教会法や教会裁判の整備、教皇文書の発給システムの調整などを実現させた。このような11世紀の教皇庁生成期に関するプロセス

は一般的な概説でも説明されているが、その後の盛期中世における展開に関してはいまだ十分な全体像がつかめていない。本研究では、続く問題を解明するための基礎作業として、教皇庁の確立期であるとされる11世紀末の改革教皇の時代からアヴィニヨン教皇の登場(1307)に至るまでの教皇庁組織の展開を整理する。

(2) 普遍君主として教皇が行使した権力の具体相

次に本研究で明らかにすべきは、盛期中世の教皇がヨーロッパの諸君主に対し行使した権力の具体相である。ここでわたしたちが念頭に置くべきは、全ヨーロッパの世俗君主に普遍的に通用する手法を確立し、それを実践する君主を普遍君主と定義するならば、以下の点で盛期中世の教皇はまさみ普遍君主と位置づけられよう。本研究で注目する教皇権力には三つのカテゴリーがある。第一カテゴリー(a)情報は、君主に送付される書簡、教皇特使による現地情報の収集、教皇の意向を反映して修道会とりわけ托鉢修道会が作製する説教や論考などが考えられうる。第二カテゴリー(b)介入は、キリスト教徒としての権利を奪う破門、特定管区内において聖務の実践を禁じる聖務停止、異端の刻印を押すことで共同体内から排除する異端審問、王を含む特定の人物をカトリック世界全体の崇敬対象として公認する列聖などが考えられうる。第三カテゴリー(c)外交は、教皇の意向を伝え現地で交渉する特使派遣、ローマや教皇宮廷で行われる神聖ローマ皇帝の戴冠式や大司教に対するパルリウム付与などの儀礼、教皇が世俗世界の支配権を与えられたとする偽文書「コンスタンティヌスの寄進状」に基づく、世俗君主に対するさまざまな特権付与などを想定しうる。

(3) 教皇庁とヨーロッパ像の転換の関係 第三に本研究で明らかにすべきは、(1)

のような組織化を図り、(2)のような具体的権力を行使することを可能にした教皇庁が、この時代におけるヨーロッパ像の展開にどのような寄与をしたのかという点である。D.Hay, Europe. The emergence of an idea (1965)が述べるように、初期中世以来のヨーロッパ人に共通の帰属意識は「キリスト教世界」であったが、中世盛期になると「キリスト教世界」にかわる「ヨーロッパ」という意識が生まれつつあった。それは盛期中世における地図資料や文献史料に明確にあらわれる。この意識が生成する背後には、ビザンツ帝国、イスラーム諸王朝、モンゴル帝国といった「他者」とヨーロッパ人の絶えざる交渉があったことが推測されるが、ヨーロッパ側のその主要な交渉経路は教皇であった。そのように理解するならば、中世後期以降に明確となるヨーロッパ意識の醸成には教皇が中心的に関わっていたという予想が立ちうる。

3. 研究の方法

本研究は、前述した研究計画を実現するために、5人の研究分担者と3人の研究協力者による研究グループを構成する。最初に研究分担者とこれまでの教皇庁研究の関わりを説明しておきたい。

【研究体制】

以下に述べるような研究体制を組織する。

全体の統括：池上俊一

(1) 教皇庁班(池上、千葉、藤崎、菊地)

(2) 地域班(千葉、加藤、小澤、田付)

(3) ヨーロッパ像班(橋爪、草生、小澤、藤崎)

全体の統括は本研究代表者である池上が担当する。池上のもとには、下記の各班を管理する事務局を設置し、研究経過ならびに成果発表の管理を行う。

(1) 教皇庁班：この班は盛期中世における教皇庁の内的展開に重点を置いて研究を

遂行する。ここには、教皇庁それ自体に精通する研究者を配置する。菊地が初期中世の教皇庁の展開を論じ池上、千葉、藤崎が盛期中世を検討する。各人は、研究目的で整理したような教皇庁それ自体がもつ諸権力の生成と発動のプロセスを明確に跡づけ、基礎情報として、残りの二つの班に提供する。

(2) 地域班：(1)の教皇庁班が、教皇庁の展開を内側から検証する班であるとするれば、(2)地域班は、ラテン・カトリック諸国という外部から教皇庁による統治戦略の具体層を確認する。千葉はドイツ・東欧を、加藤はフランス・イベリア半島を、小澤はスカンディナヴィア、田付はブリテン諸島を担当する。各人は、盛期中世における教皇の統治戦略に基づく各国への干渉の具体的事例を収集し、それら事例を他地域と比較することで地域別の特性を抽出する。

(3) ヨーロッパ像班：この班は、ヨーロッパにとって他者となる存在との関わりの中で、ヨーロッパ像の生成を跡づけ、そのなかにおける教皇庁の役割を明らかとする。草生はビザンツ帝国との、橋爪はイスラーム諸王朝との、小澤はモンゴル帝国との、藤崎はユダヤ人との関係のなかに見いだされる事例を収集し、とりわけ(1)教皇庁班の跡づけた基礎情報と対照させ、どのようなプロセスでヨーロッパ像の転換が生じたのかを跡づける。

以上の組織体制は、(a)全体会議、(b)研究班、(c)個人にわかれ具体的な研究を行う。以下、この三つのレベルの内容について説明しておきたい

(a) 全体会議：全体会議は、研究代表者、研究分担者、研究協力者全員が参加する会議である。一年に一回12月から3月を目処に行い、当該年度の調査報告と反省ならびに次年度の具体的計画と調整をはかる。当該年度の研究が年度初めに設定した目標

に到達しない場合、この全体会議において修正する。

(b) 研究班：前述した三つの研究班は、緊密に連携しつつも、班ごとに独自のプログラムを持つ。各班は、研究会のテーマに即した外部研究者を4ヶ月に一度のペースで招聘し、各班の知識と論点の拡大をはかる。現地での研究動向を知るために、前述した構成員の人脈を利用して、イタリアやドイツの研究者を招聘する。また、各人が海外の調査で身につけた文書館の利用方法などについての講習会を開催することも考えている。

(c) 個人：研究班構成員は、各自、テーマの必要に応じて、日本では入手困難な研究文献を入手するとともに、欧米現地に赴き、文書館・図書館・大学組織そして盛期中世の教皇にかかわる都市や施設で、資料収集・踏査・撮影などをおこない、現地研究者と密接な関係を築きながら、本研究に資する知的資産(文献、写真、人脈)を構築する。

4. 研究成果

本共同研究の成果は、研究代表者と研究分担者個々人の論文・著作といった活字成果に加え、毎年開催された研究報告会ならびに、本科研構成員が中心となって進めた国内外の3つの会議に見ることができる。

日本西洋史学会64回大会(立教大学、2014年6月1日)では、シンポジウム「回路としての教皇座—13世紀ヨーロッパにおける教皇の統治」において、代表者の池上、分担者の菊地・千葉・藤崎・加藤・草生が報告を行い、本共同研究の中間報告を試みた。ミュンヘン大学のゲオルク・シュトラック博士を迎えて行われた International Workshop “Medieval Papacy in its Network: Europe inside and outside” (立教大学、2014年9月12日)では、分担者の藤崎と小澤が報告を含む6名が報告を行い、シュトラ

ック博士がドイツを中心に組織する中世教皇庁研究ネットワークである *Stilus Curiae* と意見交換を行った。この際に、本共同研究とドイツ側共同研究との間で連携を進めるという合意を得、ドイツでの共同研究に分担者の藤崎を派遣した。以上の連携の成果として企画されたのが *International Symposium: Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange* (立教大学、2017年2月17-19日)である。中世における教皇の統治とコミュニケーションという統一テーマのもと、研究代表者の池上が司会をつとめ、分担者の菊地、小澤、草生、藤崎を含む13名が報告を行った。

このような活動の成果として、当初研究目的として設定した3点に対応するかたちで説明したい。

(1)「教皇庁それ自体の展開プロセス」については、初期中世からルネサンスに至るまで、教皇庁が、そのスタッフや制度のみならず、内外のコミュニケーションを通じて、ヨーロッパ全体の変動に対応するかたちで展開していることが確認された。(2)「普遍君主として教皇が行使した権力の具現相」については、研究体制で示したように、本共同研究の参加者が、自らの対象地域における具体的事例で検討することにより、イベリア半島から北欧・東欧に至るまで、君主から地方政体に至るまで、あらゆる統治レベルにおいて、ラテン・カトリック世界における教皇庁の影響が確認された。(3)「教皇庁とヨーロッパ像の転換の関係」については、ビザンツ帝国、イスラム政体、モンゴル帝国といったラテン・カトリック世界の外部との間での交渉を通じ、情報を収集した教皇庁が一つの核となり、ヨーロッパ世界それ自体の認識に変更が生じつつあったことが確認された。

以上の総合的な活字成果として、千葉が編者をつとめる日本語論集ならびに小澤が

編者をつとめる英文論集を準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 57 件)

1) 池上俊一、ヨーロッパ中世における鐘の音の聖性と法行為、思想、査読無、1111、6-26、2016

2) KUSABU Hisatsugu、Heresiological Labeling in Ecumenical Networking from the Ninth to Thirteenth Centuries, *Asian Review of World Histories* 4(2), 査読有、207-229, 2016

〔学会発表〕(計 32 件)

1) KIKUCHI, Shigeto, Authority in the Distance, *Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange* Rikkyo University (Toshima-ku, Tokyo), 18 Feb 2017

2) OZAWA, Minoru, Why Did a Viking King Meet a Pope?: Political and Commercial Background of Cnut's Journey to Rome in 1027, *Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange* Rikkyo University(Toshima-ku, Tokyo), 18 Feb 2017

3) KUSABU, Hisatsugu, "Medieval Heretics" in the East, *Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange* Rikkyo University(Toshima-ku, Tokyo), 18 Feb 2017

4) FUJISAKI, Mamoru, Medieval Papacy Facing Asia, *Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange* Rikkyo University(Toshima-ku, Tokyo), 18 Feb 2017

5) FUJISAKI, Mamoru, On the servitia of consecration in thirteenth-century curia, *DFG Netzwerk Stilus Curiae*, Munich University(Toshima-ku, Tokyo), 3 Dec 2016

6) FUJISAKI, Mamoru, Nicholas III and a Franciscan Mission of 1278 to Il-Khan, *International Workshop "Medieval Papacy in its Network: Europe inside and outside"*, Rikkyo University(Toshima-ku, Tokyo), Mar 2014

7) OZAWA, Minoru, The papal see as a circuit: Papal governance in the 13th century, *International*

Workshop “Medieval Papacy in its Network: Europe inside and outside”, Rikkyo University(Toshima-ku, Tokyo), Mar 2014

8)池上俊一、想像界の中の教皇、日本西洋史学会 64 回大会、立教大学(東京都豊島区) 2014 年 6 月 1 日

9)千葉敏之、教皇の地理的身体、日本西洋史学会 64 回大会、立教大学(東京都豊島区) 2014 年 6 月 1 日

10)草生久嗣、13 世紀東方地中海世界における「キリストの身体」、日本西洋史学会 64 回大会、立教大学(東京都豊島区)、2014 年 6 月 1 日

11)加藤玄、教皇座と地域秩序、日本西洋史学会 64 回大会、立教大学(東京都豊島区) 2014 年 6 月 1 日

12)藤崎衛、教皇使節と教皇のペルソナ、日本西洋史学会 64 回大会、立教大学(東京都豊島区)、2014 年 6 月 1 日

13)菊地重仁、アルプス以北における教皇の権威と教皇文書の影響力、日本西洋史学会 64 回大会、立教大学(東京都豊島区)、2014 年 6 月 1 日

〔図書〕(計 32 件)

1)千葉敏之、ヨーロッパの形成と成熟、小田中直樹・帆刈浩之編、世界史ノいま、ここから、山川出版社、2017、102-122、346

2)千葉敏之、岩窟と大天使、高橋慎一郎・千葉敏之、移動者の中世、東京大学出版会、2017、171-203、256

3)池上俊一、王様でたどるイギリス史、岩波書店、2016、274

4)藤崎衛、ローマ教皇とカトリック教会、藤内哲也編、はじめて学ぶイタリアの歴史と文化、ミネルヴァ書房、2016、161-185、378

5)池上俊一、ヨーロッパ中世における驚異、山中由里子編、驚異の文化史、名古屋大学出版会、2015、26-41、522

6)池上俊一、ヨーロッパ中世の驚異譚における空間と時間、山中由里子編、驚異の文化史、名古屋大学出版会、2015、202-219、522

7)池上俊一、増補魔女と聖女、筑摩書房、2015、280

8)池上俊一、森と山と川でたどるドイツ史、岩波書店、2015、280

9)池上俊一、河原温編、ヨーロッパ中近世の兄弟会、東京大学出版会、2014、539

10)池上俊一、公共善の彼方に、名古屋大学出版会、2014、599

6. 研究組織

(1)研究代表者

池上俊一 (IKEGAMI, Shunichi)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：70159606

(2)研究分担者

加藤玄 (KATO, Makoto)
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：00431883

草生久嗣 (KUSABU, Hisatsugu)
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10614472

千葉敏之 (CHIBA, Toshiyuki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：20345242

藤崎衛 (FUJISAKI, Mamoru)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：50503869

菊地重仁 (KIKUCHI, Shigeto)
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：80712562

小澤実 (OZAWA, Minoru)
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：90467259

(4)研究協力者

田付秋子 (TATSUKI, Akiko)
共立女子大学・文芸学部・非常勤講師

橋爪烈 (HASHIZUME, Retsu)
千葉科学大学・薬学部・講師